

お宝拝見

創業当時の黒電話

一本の黒電話が生んだ 世界初のベンチャービジネス

今野由梨 (ダイヤル・サービス社長)

一見懐かしいだけの黒電話だが、ダイヤル・サービス創業者、今野由梨氏の世界初のベンチャービジネスは、この一台から始まった。

話は五〇年前に遡る。働いて自立した生き方をしたいと考えていた今野氏は、一九五九年、四年制大学を卒業したが、当時の企業の採用は男子に限定されていたため、就職先は見つからなかった。

自分が活躍する場所は自分で作るしかないという考えに行き着いた今野氏は、一〇年後の六九年五月一日に起業すると日付を決めた。

「時代に追い詰められても、過去の自分を裏切らず自分の生き方を貫くには、自分で会社を作るしかない」と

思ったんです」

業種は未定だった。大学卒業後は生活するため、早朝の部、午前の部、午後の部、深夜の部と一日を四つに分けて、それぞれ違うアルバイトをした。午前の部では、作家の三浦朱門氏と曾野綾子氏夫妻のもとで原稿の手伝いをしてきた。この夫妻からのアドバイスが、今野氏の未来を切り開いてくれた。

「このお二人から、日本にいてもうだつが上がらないだろうから、世界を歩き、一人でも多くの人と語る経験を積みなさい」と、ニューヨークで開催される世界博覧会のコンパニオン募集に応募しよう薦められたのです。三〇〇〇人の応募者がいて、試験も大変でしたが、何とか合格して渡米しました。そのアメリカでテレフォン・アンサンリング・サービスと出会ったんです。このサービスは何だろうと思って、直接問い合わせると、現場を見学させてくれることになりました。ドアを開けた瞬間、何百人ものオペレーターがいて、電話秘書サービスやテレフォンショッピングの注文受け付けを行っていました。これを見た時、私の魂に直接結びついたんです。本当に運命の出会いだと思いました」

電話を使ったビジネスに惹きつけられた今野氏は、世界博覧会のコンパニオンで得たお金で渡欧した。ド



創業当時の黒電話。いまでも定期的に磨いて、大切に保管している。

イツ、イギリス、フランス、イタリアなどでテレフォン・アンサンリング・サービスを研究した。

日本に帰国し、決めた日付どおり、六九年五月、ダイヤル・サービスを設立。東京・笹塚のマンションの六畳一間に黒電話を引いて、ビジネスをスタートさせた。この時の電話が、四〇年後のいま、同社のお宝になっている。

今野氏はまず、収入に結びつきやすい電話秘書サービスから始め、初年度七五万円の利益を得た。それを元手にして七一年、「赤ちゃん一〇番」を開始した。その当時は育児ノイローゼに悩む母親が子どもを殺す事件が新聞を賑わせ、子殺しの時

代と呼ばれていた。

「核家族化自体は悪いことではないけれども、それによって、母親が孤立無援で子育てをすることに。そんな時代、ダイヤル・サービスで働く女性たちとどのように私たちが社会に貢献したいかを話し合っていて、とりあえず育児に悩む彼女らに手を差し伸べようということになったんです。電話の向こうには育児の専門家がいて、いつでも「メイ・アイ・ヘルプ・ユー?」と言ってくれるサービスを作ろう。私たちにあっては自然体で生み出したサービスでしたが、日本で初めてのことで、始めた瞬間、全国から相談が殺到して電話回線がパンクするほどの反響でした。後にアメリカでオフィスを開いた時、アメリカにもそんなサービスはないと言われました。アメリカにないということは世界初です。世界でオンリーワンのニュービジネスをつくり出したと評価をいただき、ものすごく応援してもらえたんです」

就職活動で挫折した女性が、一本の黒電話で、自分が活躍できる場所を作り出した。同社はいまやテレビ電話でのサービス「aerwa」を開始、メンタルヘルス・外国語通訳サービスをすでに提供している。このサービスもまた、新たなビジネスにつながる可能性を秘めているという。



40年前にこの黒電話から始まったサービスは、いまではテレビ電話を使ったサービスへと移行している。今野社長は大切な黒電話を手に、にっこり。